母の祈りを反復する人

宇都宮英子詩集『母の手』に寄せて

1

私は日に一度は亡くなった父や母のことを思い出す。それは子供を育てるために必死で働いていたころの姿であったり、亡くなる前の身体が弱ってきたころの姿であり、私の固有の悲しみの源泉のように汲み上げられてくる。たぶん私だけではなく多くの人は、亡くなった父母のことを何らかの形で日々想起しているはずだと私には思われてならない。それはきっと想起することが父母への感謝の気持ちと深く繋がっているからだろう。

宇都宮英子さんの第一詩集『母の手』は、父が宇都宮さんの誕生前に病死してから、一人で七人の子を育てた母の姿を想起し感謝することが中心テーマである。冒頭の詩「私の手」を読めば、宇都宮さんがこだわって大切にしてきたことが分かる。

私の手

少し前まで自分の手があまりごっつくて大きいので
人前でなるべく隠していました
あまりにも母の手に似ているので
それも嫌で嫌でたまりませんでした

ふと気づきました　自分とは手のことだと
手が語るわが人生
この手があったから　詩も書けるのですね

ざらざらで　かさかさで節くれだった　太い指
最期に組まれた　母の手は
「やっと休めるよ」と言っているようでした

やっぱりお母さん　生んでくれてありがとう
あなたの苦労を思えばどんな事でも　乗り越えて行けます

自分をいとおしむことが
家族や周りの人への思いやりにつながることを知りました

やっと　この私の手が　大好きになりました

この詩「私の手」には、人が生きていくことにおいて最も大切なことがさりげなく書かれている。両親のどちらかからの身体的特徴を人は譲り受けている。若い頃は身長や体重などの身体的特徴に自己嫌悪をして、両親に反発する場合もある。若い頃の宇都宮さんは母ゆずりの「ごっつくて大きい手」が嫌いで仕方がなかったという。しかしある時に「自分とは手のことだと」自覚したという。自分の手があるからこそ好きな「詩も書ける」のだと気づいた。

自分とは何者かと問う時に、じっと自分の手を見詰めることがある。自分の手から語られることを人はなぜか自問する。手相占いが繁盛するのも、自分とは何かを手を通して知ろうとする衝動だろう。宇都宮さんは自分の手の中にある「母の手」を自然に受け入れたのだ。八番目の子供であった宇都宮さんが生まれる前に父が病死し、母は農作業をしながら一人で子供たちを育てた。そんな過酷な労働をし続けた母の手は男勝りの手であったろう。宇都宮さんは母の人生の象徴として「母の手」を感じて、いつもその手を想起し、自らの手の中にもその存在を生かしていこうとしている。宇都宮さんの詩の重要なテーマは、その意味で「私の手」の中に「母の手」を豊かに発見することだ。どんな逆境でも身を粉にして子を育てた「母の手」を愛することは、実は「私の手」のを好きになるように、懸命に生きることだと考えている。

2

「母の手」にはまた現実の手ではない、理想化された手も含まれる。その理想化された「母の手」は次の詩「悲しみの情景」に描かれている。

悲しみの情景

村はずれの古い神社に
祭りの旗が立ち並び
花吹雪を散りつくした
桜の老樹の枝々から
あふれ出る若緑青緑

その木もれ陽が
キラキラ光る参道は
訪れる参詣人で賑わい
その中に　野良着ではない
美しい着物姿の母がいた
節くれた手を合わせ
一心に社殿で祈るその姿を
そっと見上げているだけでも
胸がつまった子供のころの
あの時

その母はもういない
五月の野辺には

青い香りを放つ青葉若葉が
みちみちていて
再び春祭りの旗が
風にはためいているけれど
元気な母は
美しい母は　もうその中にはいない

「美しい着物姿の母」は、春の祭りの時に、合掌をして一心に祈っている。きっと子供たちの幸せを祈っていたに相違ない。宇都宮さんにはその光景が想起すると胸が締め付けられるような「悲しみの情景」になってしまうのだろう。子供の幸せだけを願って生きた母の信念ある生き方の象徴が、合掌する「母の手」なのだろう。宇都宮さんが「私の手」の中に「母の手」を重ねているということは、きっと母の愛が子への期待ではなく、子に手を通して具体的に働くことの価値を伝えているからだと思われる。「悲しみの情景」は、母が無償の愛を神仏に捧げている情景として読むものに立ち現れてくる。第一章「母の手」二十三篇の中には、その他に「兄妹」「父」「希望」、「声」などで亡くなった父と兄への感謝の思いを記し、また交通事故で亡くなった長男と「希望」である次男への未来を祈っている。決して幸福だったとはいえない家族たちを詩の中で宇都宮さんは再会させて、ともに生きようとしているのだろう。その宇都宮さんの家族への感謝の姿勢が詩の中に誠実に読み取れるのだ。

3

二章「初なりの柿」十九篇は、郷土の親しい友人や知人を他者として描きながら、見慣れた故郷の風景を奇跡のように感じて描いている。その中で私は詩「仕舞」が気に入っている。宇都宮さんが能楽師である夫に対してどのように敬意を抱いて日々接しているかが描かれている。

仕　舞

――謡曲「紅葉狩」――

座敷八畳を　所狭しと摺り足に
サシ回し（一）　サシ回し（二）
扇を開きながら　左足より左へ回り前方へ正向

六十の手習いならぬ
七十の稽古始
きりりと　袴をつけて仕舞を舞う

――紅葉狩――　クセ

されば仏も戒めの
道は様々多けれど
殊に飲酒を破りなば
邪淫妄語も　諸共に
乱れ心の花鬘
かかる姿は　また世にも
類ひ嵐の山桜

素謡を四十五年　ひと筋に貫く貴方に
いつも私は　夢みていた舞い姿
燻し銀の扇を　少しづつ開きながら

摺り足をくるりと回し　正面を向き
俯き加減の顔を　きりりと上げる
顔を半隠しの　扇を上に翳す

私の胸は高鳴る

寝ても覚めても　謡いながら仕舞をする
少年の輝き
摺り足の　白足袋が紅葉狩の女になる

能楽師の家のお座敷犬も
涼しい縁側に　お座りをして
ご主人の　出来映えをしっかり見つめている

宇都宮さんのご主人は能楽師で後身の指導にも当たられているとお聞きしている。宇都宮さんの家では当たり前の光景なのだが、宇都宮さんは夫の舞う姿を奇跡のように眺めている。夫が少年になって舞い、紅葉狩の女になって舞う姿に胸を高鳴らせて見詰めている。伴侶である唯一の目撃者として心に刻んでいるのだ。「仕舞」の意味を感じながら表現者として夫に寄り添っている。そして自らの詩作の在り方にもそれを生かしているのだと思う。　夫の手には扇があるが、その夫の手にもどこか「母の手」をきっと重ねているのだろう。夫と同様に母の生き方もまた宇都宮さんの前では、素敵な表現者であったのだろう。その表現者を理解し、見守り、ともに生きようとする宇都宮さんもまたこの第一詩集『母の手』によって他の表現者に見詰められるに違いない。家族とは何かを考えることは、父や母や兄弟と過ごしたことを大切なものとして問うことであり、宇都宮さんの詩篇は、その問いに深く答えているだけでなく、家族と生きる意味を痛切に伝えている詩集だと私は考えている。

4

二章の最後の詩に「晩夏」がある。この詩に宇都宮さんは特別な思い入れがるようだ。幼少の頃、夏の終わりに畑で働

いている母を遠くで見ながら、川辺で友と遊んでいた。その時に友と遊んだ花がツリフネソウだった。その花と母を重ね合わすことによって、貧しかったが幸福であったことを絶えず想起している宇都宮さんの感受性を、子や孫にも伝えようとしている。母を見つめることはツリフネソウを見ることと等価であり、それほど侵すことのできない命の尊厳のようなものとして想起されている。

晩　夏

雨上がり　川辺に見つけた
ツリフネソウ（釣舟草）

子どもの頃に遊んだ　友だちの顔が浮かんだ
まさちゃんは
五本の指に　花をかぶせて
ほらほらほらと　指人形劇をしてくれた

ちかちゃんは
桃色舟の競漕だと群生の花々を
摘んでは川の流れに　浮かべた
ツリフネソウは踊るように水面を染めた

熟した果実のパチッと弾ける
種の指先の感触　撒き散らした
飽くことを忘れ
遊びほうけた生家の川辺

野良着の母が畑に働く姿を
遠くに見ながら
泥んこになって　走りまわった
あの頃

母がしてくれたように
娘に　力強くあきらめないでやりぬく
そんな生き方を伝えたい
可憐に咲く花のように

今　孫娘は花のそばにじっとしゃがんで
話しかける
「帆かけ舟を吊るしたみたい」
「風に揺れて歌っているみたい」

花言葉「私に触れないで」
花の叫び「がまんできない　耐えられない」
川辺で花のささめきを聞く

八月が終る

川辺に咲くツリフネソウは紅紫の帆掛舟をイメージさせる野草といわれるが、実際は三枚の花で横向きの三角錐を作り、最奥には蜜があり虫を誘い受粉の手助けをさせる。口の部分には二枚の花びらが垂れている不思議な形をした花だ。花言葉には、宇都宮さんが書かれている以外に「詩的な花」があり、古来から詩人にインスピレーションを与えた花だったのではないか。宇都宮さんは、友だちが花を摘んで指人形劇や舟に見立てて川に浮かべて遊ぶように、花を摘むことにためらいを覚えていたようだ。なぜなら、その花を母と同じように川辺で一生懸命咲いていると感じていたからだろう。与えられた場所で健気にまた可憐に咲くことの美しさを見つめることが宇都宮さんの視線なのだ。ツリフネソウはホウセンカの仲間で「がまんできない」ように種を弾き出すそうだ。「私に触れないで」という花言葉は、この花が水辺で気高く生きていることを示しているのだろう。きっと宇都宮さんはこの花の存在からも「母の祈り」を感じているに違いない。自らもそのようにありたいと願い、娘や孫娘にその花との語らいを願っているのだ。その場所に自生している野草の花々に人はある時に魅せられるのだが、宇都宮さんはツリフネソウを通して母を強く感じている。ツリフネソウの二枚の垂れている花びらを「母の手」の合掌のようにもきっと感じて見入っているのだ。そんな宇都宮さんの家族・知人・友人そして野草などの自然を愛する詩篇を多くの人たちに読んで欲しいと願っている。